

## 審査の結果の要旨

氏名 福嶋信吉

福嶋信吉氏の「近代民衆宗教における「信心」と「教団」」は、天理教と金光教で用いられてきた「お道」や「信心」の概念に注目し、明治後期から昭和初期にかけて、それらの語を媒介としながら、これらの宗教集団において、近代的な制度としての「宗教」とは相対的に独立した伝統が形成されていく経緯を探ろうとしたものである。

これまでこれら宗教集団は、民衆宗教や新宗教として研究されることが多く、その場合、研究者側が前提としている近代的な「民衆」や「宗教」の概念が暗黙のうちに持ち込まれてしまうことが多かった。従来 of そうした研究を批判しながら、福嶋氏は信仰者たちはむしろ「お道」や「信心」というある種の超越性を示唆する概念を手がかりとし、近代的な制度に一定の距離をとるような視点を保ちながら、時代の要請に応じて、伝統を形成していったととらえる。

このような観点から、(1)明治政府に妥協して定められた「教典」を相対化しながら大正期に独自の天理教信心の立場を打ち出そうとした増野鼓雪、(2)「生神金光大神取次」の理念に「お道」の核心を見いだすことにより昭和初期から戦後の金光教団を力強く指導した高橋正雄、(3)明治末から昭和初期の大阪で商人としての経験を踏まえ、「神様がご主人、人間は奉公人」という独自の「信心」を「お道」の「教え」として表現した金光教の湯川安太郎の思想と信仰実践が検討されている。これらの例を通して、「教団」「教え」などの概念が「お道」の概念を媒介として熟していくさまが究明されている。また、同じく近代社会の枠内で宗教伝統の革新を図ろうとした試みとして、境野黄洋らの「新仏教」や内村鑑三の「無教会」が比較対象として取り上げられ、論点に膨らみを与えている。

近代における宗教伝統の形成と変容という問題について、また、「民衆宗教」の「宗教」伝統としての自己形成という問題について、なお多くの課題を残しつつも、新たな論点を提示した意欲的な論文であり、近代日本宗教史研究への貢献が少なくない業績である。

よって審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。